



TITLE:

京大広報 No. 265

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 265. 京大広報 1984, 265: 451-460

ISSUE DATE:

1984-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209421>

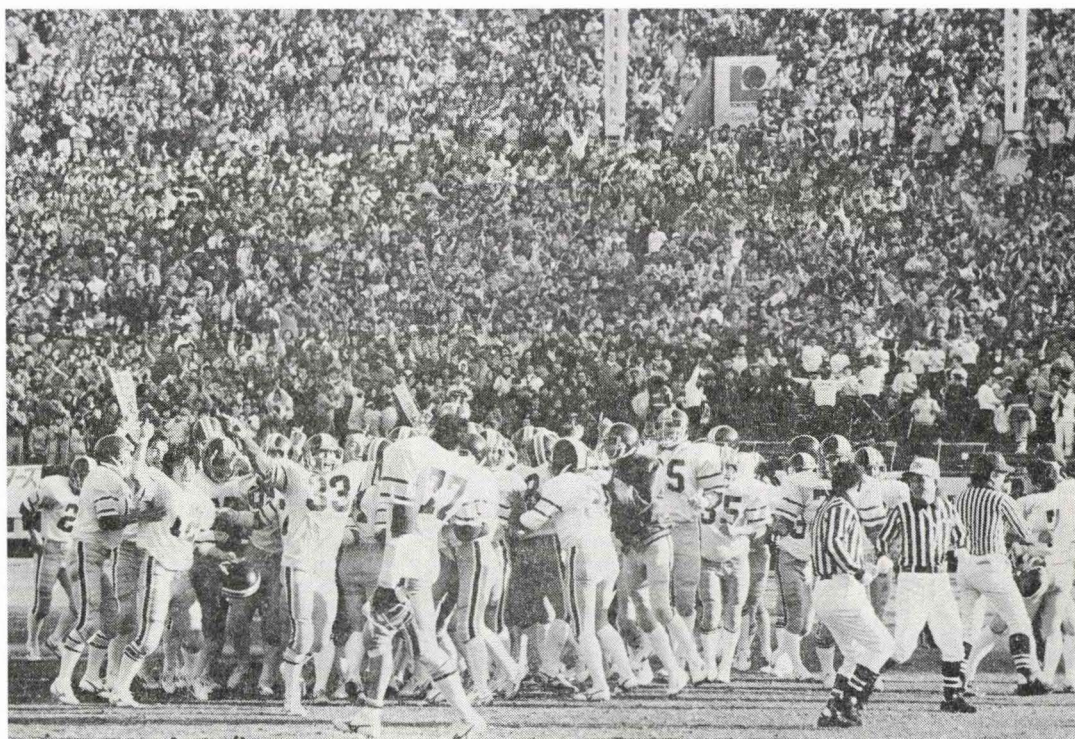
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 265

京都大学広報委員会



アメリカンフットボール部 甲子園ボウルで優勝 ー関連記事本文459ページー  
(勝利の瞬間, 写真は「スポーツニッポン新聞社」提供)

## 目 次

新年を迎えて……………総長 沢田 敏男………… 452	〈紹介〉	
新年名刺交換会…………… 452	霊長類研究所・系統研究部門…………… 457	
部局長の交替等…………… 453	〈保健コーナー〉	
加藤新平, 福井謙一, 満田久輝, 藪内 清, 平岡武夫の各名誉教授が日本学士院会員に 選ばれる…………… 453	肥満とその対策…………… 458	
栄誉(武居有恒教授, 福井三郎名誉教授)………… 456	アメリカンフットボール部	
外国人留学生懇親会…………… 456	甲子園ボウルで優勝…………… 459	
自衛消防団員に感謝状贈呈…………… 456	日 誌…………… 459	
	〈随想〉	
	学習型と思考型	名誉教授 伊藤 清………… 460
	訃 報…………… 460	

## 新 年 を 迎 え て

総長 沢 田 敏 男

あけましておめでとうございます。

輝かしい年頭にあたり、ご挨拶を申し上げます。京都大学は本年創立87周年を迎えますが、創立以来、清新なる学術研究の推進に努め、創造性と基礎研究を重視する大学として発展してまいりました。

最近の慶ばしいできごととしては、昨年12月5名の名誉教授 — 藪内 清先生、平岡武夫先生、加藤新平先生、福井謙一先生、満田久輝先生 — の方々が栄えある日本学士院会員に選ばれました。また多くの教官が国内外の学会等より受賞の榮譽に輝かれ、学術研究の推進に大きく寄与されました。

一方、カレッジスポーツの面においても本学体育会のアメリカンフットボール部が昨年12月甲子園ボウルにおいて優勝し、新年早々国立競技場において行われたライスボウル（第1回全日本選手権大会）で勝利し、日本一の偉業を達成しました。

これらの成果やできごとをみる時、大きな慶びと共に、無限の可能性を秘めたわが京都大学の面目躍如たるものを痛感するものであります。

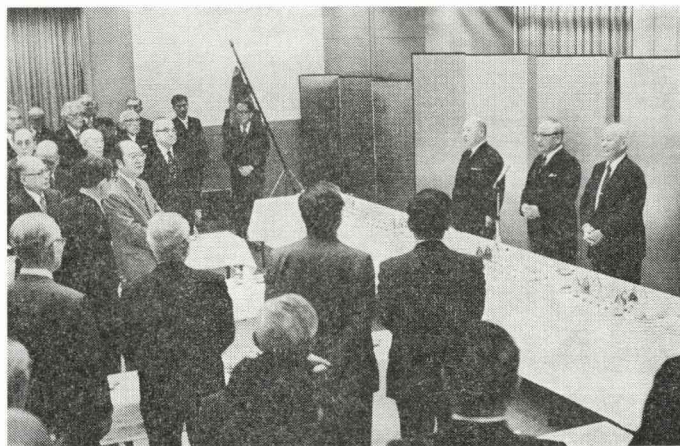
私は、昨年12月再び総長としての重責を担うことになりました。新しいこの年を、私は総長一年生の気持ちで、意を新たにして職務遂行のために、より一層精進いたしたいと存じます。特に京都大学創立100周年並びに21世紀を展望し、長期的視野に立った本学の将来計画の準備にも取り組みたいと考えております。皆様のご理解とご協力を切にお願いいたします。

### <大学の動き>

#### 新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日（水）午前10時10分から京大会館において、沢田敏男総長をはじめ平澤 興、奥田 東元総長、名誉教授、教職員約300名の出席を得て行われた。

初めに沢田総長から新年の挨拶があり、次いで平澤元総長の発声による乾杯ののち歓談、10時30分、松田長三郎名誉教授の発声で万歳を三唱し散会した。





## 部局長の交替等

## 医学部長

伊藤洋平医学部教授（微生物学講座担当）が昭和58年12月16日医学部長に再任された。任期は、同60年12月15日までである。

## 経済学部長

平田清明経済学部教授（経済原論講座担当）が昭和59年1月10日経済学部長に再任された。任期は、同60年1月9日までである。

加藤新平、福井謙一、満田久輝、  
藪内 清、平岡武夫の各名誉教授  
が日本学士院会員に選ばれる

このたび、次の各名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

## 加藤新平名誉教授



加藤名誉教授は岩手県出身、昭和11年京都帝国大学法学部を卒業後、京都帝国大学法学部助手、助教授を経て、昭和24年4月教授に任ぜられ、法理学講座を担任、法学部長、評議員を歴任、昭和50年停年により退官

された。その間、法哲学・法思想史などの分野で研究教育に専念され、幅広い学識と綿密な考察に裏付けられた重厚な著作を通じて斯学の発展に重要な貢献をされるとともに、法哲学専攻者をはじめ、多数の人材を育成された。

同名誉教授の学術業績は広範囲に及んでいるが、その特徴は、世界観構想への強い関心のもとに根源的・全体的視野から法・国家の原理的諸問題に個別的に取り組むことを通じて、同時に、学問としての法哲学の可能性と限界を見定めようとする、緊張した思索態度にみられる。このような態度は、カントの抵抗権否認論を論じた「カントの法哲学に就いての一考察」などの初期の一連の論文、「国家権力の正統性」、「法学的世界観」などの具体的問題に即した研究から始まって、法の実現すべき価値理念の客観的基礎づけの可能性を方法論的に論究した「法の目的」、「価値相対主義」などを経て、自己の法哲学観を提示した「法哲学の学問的性格・基本任務・諸課題」に至るまで、終始一貫して持続されている。『法哲学概論』

（昭和51年）は、このような長年にわたる基礎的研究の集大成であり、わが国の法哲学の発展に一時期を画する体系書として高く評価されている。

同名誉教授が最も力を注がれたのは、価値相対主義の批判的検討であり、学位論文「価値相対主義」においては、価値相対主義の主張内容とその実践的帰結とが、代表的論者の見解の丹念な比較検討によって体系的に解明され、問題点とその克服の方向が的確に指摘されている。その方向は、『法哲学概論』最終章において、人間存在の本質的な連帯性・共同性および自由と平等の相補的關係についての健全な思弁による認識を原理的観点とする正義原理の構想として輪郭が示され、今日世界的にみられる規範的正義論の動向を先取りした、示唆に富む指針の提示として注目されている。

また、同名誉教授は、長年にわたって日本法哲学会の理事・理事長として学会の組織・運営に指導的な役割を果たされ、現在も同学会名誉会員として活躍されている。

（法学部）

## 福井謙一名誉教授



福井名誉教授は奈良県出身、昭和16年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業後、同18年より京都帝国大学工学部講師、助教授を経て、同26年4月教授に就任、燃料化学第4講座、後に同第2講座（現 石油化学科炭化

水素物理化学講座）を担任、評議員、工学部長を歴任の後、同57年4月停年により退官され、同年6月より京都工芸繊維大学長として活躍されている。

この間、同名誉教授は物理化学の分野で鋭意研究教育に専念され、幾多の輝かしい業績を挙げられるとともに、数多くの人材を育成された。

同名誉教授の研究の展開の根源となったのは、化学反応の本性の追究で、「フロンティア軌道理論」はその中核をなすものである。すなわち、芳香族化合物の最高のエネルギーレベルにある電子の分布が、反応試薬の反応位置選択性と並行することを昭和27年、世界に先がけて見出され、この特定の軌道をフロンティア軌道と名付け、フロンティア電子密度とよばれる反応性指数を提唱された。さらにこの理論を、不飽和化合物の重合反応性、そのほか各種の反応性質、さらに飽和化合物の反応性、また分子間に働く力等の理論的解析に向けて展開するとともに、有機半導体、電導体あるいは非晶質の電子物性の解明にも応用して、幅広い研究を進められた。

昭和39年、ディールス・アルダー反応におけるフロンティア軌道間相互作用の研究を通じて、広く有機反応における立体選択性が軌道の対称性によることを見出された。さらに昭和45年には、化学反応の路に関した極限的反應座標の概念を提唱され、これとフロンティア軌道理論との関連を明らかにすることによって、化学反応路の理論を定量化にむけて大きく発展させられた。

同名誉教授は、上述の化学反応理論を中心とする分子科学・分子工学の広い分野の基礎的研究のみならず、多数の合成高分子ならびに生体高分子に関する実験的、応用的研究などにおいても輝かしい業績を挙げられ、学界のみならず産業界にも大きく貢献された。

同名誉教授のこれらの研究業績をたたえて、昭和37年、日本学士院賞が授与され、同56年には文化勲章とノーベル化学賞が授与された。また昭和45年には国際量子分子科学アカデミー会員に、同56年には米国々立科学アカデミー外国人客員会員、ヨーロッパ芸術・科学・文学アカデミー会員、さらに同58年にはアメリカ芸術・科学アカデミー外国人名誉会員に選ばれ、現在、日本化学会々長の重任にあたられる等、国内外の学会においても活躍され、わが国の学術研究全般の振興に大きく貢献されている。

(工学部)

## 満田久輝名誉教授



満田名誉教授は大阪府出身、昭和12年京都帝国大学農学部農林化学科を卒業後、副手、助手、講師、助教授を経て、昭和27年化学研究所教授に任ぜられ、その後、昭和30年農学部教授に就任、栄養化学講座を担当され、

昭和53年停年退官された。引続き5年間甲子園大学長として教育と研究に尽瘁され、現在は、財団法人・環境科学総合研究所理事長・所長として基礎研究を進められる一方、財団法人・生産開発科学研究所にて応用研究に精励されている。

この間、同名誉教授は、多数の有能な人材育成に尽力され、栄養化学、食品工学、酵素化学、植物生理化学の研究に励まれ、300編近い研究論文、17編の著書を公にされている。ビタミンの植物生化学的研究、米の栄養・食品工学的研究、タンパク食糧資源の開発、栄養・食品に関する基礎研究、食糧備蓄に関する研究がその支柱になっている。ビタミンB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>6</sub>およびCの存在意義を植物自体の立場に立って究明し、その間に見出した新事実について活用を計られた。とくに、ビタミンB<sub>2</sub>の生合成機構に関する緻密な研究は国の内外で高く評価されている。また、白米の各種栄養強化の研究により、世界の米食民族の栄養改善に貢献された。さらに、冷血動物の冬眠中の呼吸に関する研究から着想を得て、穀類の休睡眠密着包装法を開発された。本法の原理はガス遮断性のプラスチックフィルム袋に穀類、豆類を炭酸ガスと共に密封すると、タンパク質と炭酸ガス間の相互作用によって袋内の空間体積が減少し、密着包装体となることにある。この炭酸ガスとタンパク質間の相互作用に関する研究は動物にも応用され、活魚の休睡眠はじめ各種の温血動物の代謝速度の人為的調節などの研究にまで展開されている。

以上の功績によって、第1回科学技術庁長官賞(1959)、日本栄養・食糧学会賞(1962)、日本ビタミン学会賞(1963)、国際食品科学工学会バブコック・ハート賞(1971)、斯学の最高賞である同学会の国際賞(1974)、日本学士院賞、紫綬褒章(1980)、アメリカ化学会農芸化学食品化学賞



(1981)を受賞されている。一方、日本栄養・食糧学会長、日本ビタミン学会長、FAO/WHO/UNICEFの委員、第10回国際栄養学会議組織委員長、第5回国際食品科学工学会議会長の重責を全うされる等、国際学術交流にも貢献されている。(農学部)

### 藪内 清名誉教授



藪内名誉教授は兵庫県出身、昭和4年京都帝国大学理学部宇宙物理学科を卒業後、同教室の副手をへて、昭和12年東方文化研究所研究員となり、昭和23年同研究所が京都大学人文科学研究所に合併されるにともない、

翌24年京都大学教授に就任、その後、人文科学研究所長をつとめられ、昭和44年停年により退官された。退官後も龍谷大学文学部教授として研究と教育にたずさわられ、その後京都市教育委員として教育行政にも尽力されている。その学問的業績にたいする内外の評価はつとに高く、昭和45年には朝日文化賞、昭和47年にはアメリカ科学史学会よりジョージ・サートン賞を贈られ、現在も国際天文学連合天文学史部会委員、国際科学史学会会員として活躍されている。

同名誉教授の最大の業績は、一言でいえば、中国科学史という新しい研究分野を開拓され、確立されたことであるが、それは大きく三つに分かれる。第一は中国天文学史、とりわけ天体の位置計算を主とする数理天文学である暦法の歴史の研究であり、天文計算法の体系と殷代以来のその発展の過程を解明された。この方面の成果としては『隋唐暦法史の研究』(昭和19年)、『漢書律暦志の研究』(昭和22年)、『中国の天文暦法』(昭和44年)がある。

第二は中国科学技術史の共同研究を組織、指導され、またそれを通して中国における科学技術の発展の独自のパターンを明らかにされたことである。共同研究の成果としては、『天工開物の研究』(昭和28年)と四冊の断代史的研究『中国古代科学技術史の研究』(昭和34年)、『中国中世科学技術史の研究』(昭和38年)、『宋元時代の科学技術

史』(昭和42年)、『明清時代の科学技術史』(昭和45年)がある。そしてこれらの成果を基礎に、退官後『中国文明の形成』(昭和49年)という名著を執筆された。

第三は日本と中国の科学技術の比較研究を推進されたことである。『立杭窯の研究』(昭和30年)、西陣機業の研究はこの方面の共同研究の成果であり、論文は『中国の科学と日本』(昭和47年)に収められている。

そのほか『中国の科学文明』(昭和55年)などの啓蒙的著作、『アルマゲスト』(昭和24年)などの翻訳も多く、また中国科学史だけでなく日本・インド・西洋の科学史を専攻する多くの人材を育成された。人文科学研究所はいまでは中国科学史研究の世界的中心の一つであるが、それは同名誉教授の研究業績と研究指導のたまものといえよう。ひいてはそれが日本における科学史研究分野の確立の一因ともなったのであり、昭和49年に日本で開かれた第14回国際科学史会議では組織委員長の重責を果たされた。

(人文科学研究所)

### 平岡武夫名誉教授



平岡名誉教授は大阪府出身、昭和8年京都帝国大学文学部哲学科支那哲学史専攻を卒業後、同文学部副手、第三高等学校講師を経て、中華民国に留学、同13年に帰国して東方文化研究所の研究員となられた。同23年に

東方文化研究所が京都大学人文科学研究所に合併され改組されるにともなって京都大学助教授に就任され、同35年教授に昇任、中国思想部門を担当された。同46年附属図書館長、ついで評議員に併任され、同48年停年により退官された。その後、日本大学文理学部教授をつとめられた。

東方文化研究所時代には吉川幸次郎研究員の協力者として、五経正義の一つたる尚書正義の校定に従事し、『尚書正義定本』(昭和14年～18年)を刊行された。個人研究としては、甲骨文や青銅器銘文を用い、民俗学的手法をも取入れた幅広い視野から、尚書をはじめとする経書つまり儒教の経

典の成立史に焦点を合せて、きわめて独創性に富む『経書の成立』(昭和21年)をまとめ、ついで時代を降って尚書を続けた人々の事蹟と思想を跡づけて、のちに『経書の伝統』(昭和26年)に収録される諸論文を発表された。そして殷周革命から辛亥革命までの中国三千年の歴史は、経書が指導理念となっていた時代であり、その経書の世界観は「天下の世界観」と呼ぶべきものであるとの認識を深められた。最近刊行された『経書の成立』増補版(昭和58年)の副題を「天下の世界観」とされたのは、そのためである。天下とは、漢字の文化を共通の基盤とする世界のことであり、中国文化の特質は漢字文化にあるとするのであって、その要旨は『漢字の形と文化』(昭和34年)に発表されている。

人文科学研究所時代には白氏文集の共同研究を

組織し、日本各地に秘蔵されている古鈔本を探索して写真に収め、典拠を十分に吟味して信頼にたる校定本を作ろうと意図され、その成果は朱墨二色刷りの『白氏文集』(昭和46年～48年)全3冊として発表された。また世界の唐代研究者に多大の便宜を提供すべく、多数の協力者の応援をえて、『唐代研究のしおり』(昭和29年～40年)シリーズ全16冊の刊行をなしとげられた。合計すれば七千ページに及ぶ労作で、いずれの巻にもみずから長文の序説を執筆されている。昭和40年、同研究所に東洋学文献センターが附設されるや、初代のセンター主任に就任、『東洋学文献類目』の出版を監督された。退官後も『白居易』(昭和52年)を執筆され、「全釈漢文大系」全33冊の編集に当たり、みずからも『論語』(昭和55年)の全釈を完成された。

(人文科学研究所)

## <栄 誉>

武居有恒教授(農学部)

昭和58年10月6日、オーストリア共和国政府から同国の学術の進展に貢献した功績により、同国栄誉大銀章が授与された。

福井三郎名誉教授(工学部)

昭和58年11月18日、ドイツ連邦共和国政府から生物学分野における日独間の学術・文化交流に貢献した功績により、同国功労十字勲章(第一級)が授与された。

## 外国人留学生懇親会

本学では、毎年12月に総長招待による外国人留学生懇親会を開催している。この懇親会は、学生部において昭和36年以来実施しているものであって、本学に在学している留学生が、総長、各学部長をはじめとする多くの教職員及び留学生の世話をしている関係者との懇談の機会を持ち、相互理解を深めるためのものである。

本年度も12月7日(水)、午後6時から京都グランドホテルで、留学生、教職員、招待者等約500名が出席して開催された。

最初に、沢田敏男総長及び道田信一郎国際交流委員会副委員長の挨拶があった後、神野博学生部長の発声による乾杯でパーティが始まった。

懇親会は、終始なごやかな雰囲気の中に進められ、中国留学生の胡弓演奏、フィリピンのパン

ブーダンスをはじめ各国のお国自慢の歌や踊りも披露されて、午後9時すぎに閉会した。

(学生部)

## 自衛消防団員に感謝状贈呈

12月21日(水)午前10時から、本部事務局長室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝





状が贈呈された。この日感謝状を受けた団員は、  
傍島 孝、濱田 陽、辻本和夫（以上経理部）、  
柳田一成（理学部）の各氏である。

このあと、午後2時から、本学自衛消防団と左

京消防署合同による消防演習が教養部A号館を中心に行われ、自衛消防団の日頃の訓練成果が披露された。

## < 紹 介 >

### 霊長類研究所 系統研究部門

霊長類研究所の最も新しい部門として、1975年に系統研究部門が設置された。本研究部門は、約6,000万年前の地球上に出現した原始的な霊長類からヒトの誕生に至るまでの系統発生と、進化の機構を明らかにすることを究極の目的としている。このために広い分野にわたる基礎が要求されるが、本研究部門ではとくに形態学、分類学、古生物学、地史学などに重点がおかれている。日本が霊長類の化石に恵まれないこともあって、本研究部門の構成員は、東南アジア、南アメリカ及びアフリカの各地において、あらゆる機会を利用して調査を続け、それぞれに成果をあげている。

その一端を紹介すれば、中・南米に住む比較的古原始的なサル（サルの進化の道程をさぐろうと、南アメリカの最北端をしめるコロンビアの半砂漠地帯で調査を行ってきた。1977年の60日にわたる予備調査によって約1,000万年前の哺乳類の化石が多量に発見され、その後の調査に「サル化石発見」の大きな希望を托すことができた。

1979年には、コロンビアの調査に75日を充てることにして、サル（サル）の化石を求めて半砂漠をひたす

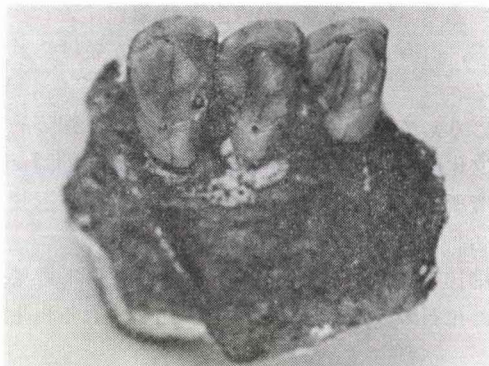


写真2 ホエザルの祖先の上顎骨（一部）  
約1,000万年前、コロンビア産

らに歩きまわったが、ひどい失望の連日であった。ホエザルの祖先に当たる小臼歯を発見したのは、調査開始から69日目であった。もっとよい化石を、新しい種類の化石をと、隊員は燃えた。しかし、調査期間はいたずらにすぎ去った。

1981年と1982年の調査は、サル（サル）の化石を発見した場所に集中した（写真1）。化石を含む粘土を掘り起こし、乾燥させ、3ミリ程度のふるいにかけた。ふるいに残ったものを丹念に観察し、化石を拾い出す。ふるいを通った細粒の土砂を集め、数キロも離れた今にも水がたえそうな小川へ運び、1ミリ程度のふるいで水洗を行う。くる日もくる日も、このような作業の連続であった。機械化が進んだ日本のことを知る現地人は、単純な作業を続ける隊員を笑った。これこそ正道であり、どのような先進国でもこの方法しかないことを彼らに理解させるのは困難であった。こうして、45個に及ぶサル（サル）の歯を発見することができた（写真2）。

これらの化石が現生のどのサル（サル）の先祖に当たるのか。もっと古い時代の化石とどのような関係にあるのか。化石の新発見によって、系統発生や進化機構についてのこれまでの仮説が実証されるのか、それとも否定されるのか。否定されるとするとどのよ

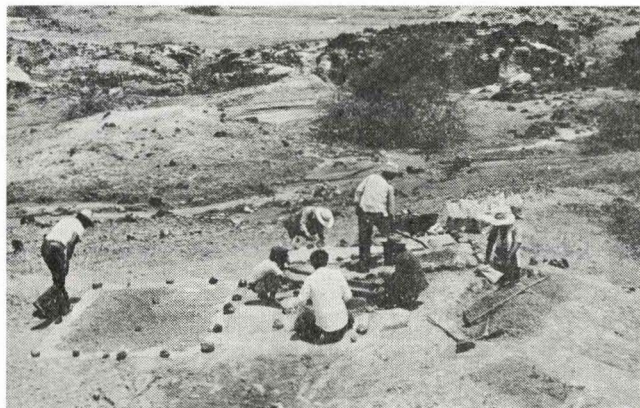


写真1 コロンビアの発掘現場



うな新説が出されるのか。このような研究を行うまえに、非常に長い準備時間をついやすのが本研究部門としての宿命である。

本研究部門が関係する発掘調査は、インドネシアやエチオピアなどでも進めており、ヒトの出現と直接に結びつく約2,000万年前の化石が主な対象である(写真3)。赤道直下の気候に苦しみながら、コロンビアと同じような作業が続けられている。

こうして発見された霊長類の化石は、国際的な「文化財」であり、研究のために一定の期間だけ研究所にとどめられやがてそれぞれの国へ返却される。

約10年にわたる一連の海外調査によって収集された化石の模型や、比較研究に用いられる現生の

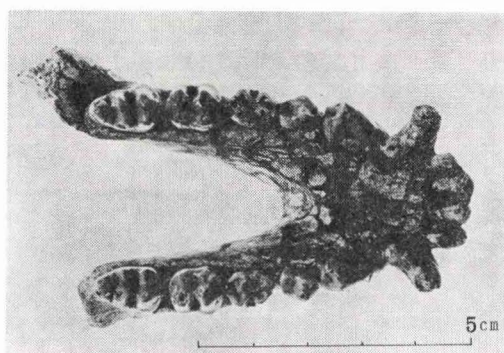


写真3 ニホンザルに近縁なブタオザルの下顎骨  
約90万年前、インドネシア産

サルは、収納庫をあふれだし、研究所の廊下にとこせましと積み上げられている。

(霊長類研究所)

## 保健コーナー

### 肥満とその対策

ヒトは経済的余裕と食品選択の自由があれば、動物性食品を多く摂る傾向があると言われていた。昭和22年度と昭和54年度の日本人の1日当り動物性蛋白質摂取量を比較すると、11gから39.4gに、総脂肪量は13gから54.8gへと増加している。この期間に20才から69才までの男女の平均身長はそれぞれ5.2cm、4.7cm高くなり、平均体重は6.1kg、4.1kg増加し、体位が著しく向上したことを厚生省国民栄養調査は示している。この調査結果の平均値をみる限りでは、昨今、保健上好ましくないとされている肥満に関しては差し迫った課題という印象は受けない。しかし、食餌の欧米化と共に労働量の減少に伴って肥満者の増える傾向が指摘され、健康長寿を望む立場から肥満に対する関心が急速に高まってきている。

#### 肥満の成因と判定規準

肥満の発生には大脳の摂食中枢、満腹中枢、ホルモン、食餌、運動、遺伝、薬剤などの関与することが動物実験で確かめられている。一般によく見られるのは、病気でない肥満(単純性肥満)であって、この場合には遺伝的素因、食餌と社会環境、年齢因子などが複雑に絡み合って成立するものとされている。

肥満の両親からは肥満児の出生率が高い。また、肥満家系は、肥満以外に異常を認めないものの、インスリンの過剰分泌と脂肪代謝異常を認めるもの、インスリン分泌低下による糖尿病を認めるものの3群に大別できると言われている。これらのことは肥満の発生に遺伝が強く関与していることを示唆している。筋肉活動量が低下し手近に食べたい物がある上に日常生活の心理的ストレスによる過食の結果、肥満は増強される。乳児期の肥満は脂肪細胞の数が増加することによるが、この時期に増加した細胞数は生涯にわたって減ることはない。思春期には脂肪細胞の数も増加するが、その上に個々の細胞の肥大が加わる。中年以降の肥満は脂肪細胞肥大によるものであるから、比較的減量しやすいものとされている。このように年齢層により特質のある肥満が生じる。

肥満の判定規準として種々示されているが、一般に身長(cm)から100を差し引いたものに0.9を掛けた数値を標準体重(kg)とすることが多い。この数値の±10%以内を正常とし、+10~+20%を肥満傾向、+20%以上を肥満としている。

#### 肥満に伴いやすい疾患

単純性肥満が特別な病気のためではないにしても、肥満が続くと、さまざまな病気や異常が合併しやすいことが知られている。糖尿病、高血圧症、心筋障害をはじめとし、脂肪肝、肝硬変症、

胆石症、腎障害、痛風、高尿酸血症、動脈硬化症、静脈血栓症、痔核、種々の感染症、関節炎、腰痛症、妊娠中毒症、子宮体癌、皮ふ炎、多汗症、白癬、扁桃肥大、耳下腺腫脹などの他不妊、月経異常がある。これらの中には、死亡率の比較的高い疾患があることは注目に値する。

#### 対 策

肥満治療法の原則は、摂取エネルギーより消費エネルギーの多い状態を長期にわたって保ち続けることである。急に痩せようとせず、気長く取り組むことが成功の秘訣である。脂肪組織に蓄積されている脂肪をエネルギーとして利用し、筋力、筋持久力をむしろ高めながら脂肪を減量させることである。具体的には食餌療法と運動療法の併用が最も良い。極端な減食のみでは脂肪よりも筋肉が衰え、体力が低下する。

食餌療法の要点は糖質を控え、蛋白質を多く、脂肪は植物油の比率を増して、動物性脂肪：植物性脂肪を1：2とするように心掛け、全体として総カロリーを減らすことである。ビタミン、ミネ

ラル、せんい類を多く摂るために野菜、海藻、きのこなどをできる限り摂るようにしたい。一度にまとめ食いは避けることは避け、食事時間を長く、口に入れたものは20回以上噛むようにし、菓子、ジュース、砂糖は脂肪を沈着させやすいので極力避ける。

筋力、筋持久力を高めながら脂肪を減らすためには減食に適当な運動を組み入れるとよい。筋肉の柔軟性、協調性を保つための体操と、エキスパンダー、鉄垂鈴を用いる筋力を高める運動と、1日朝夕20分間の早足の歩行でも筋持久力アップに役立つとされている。体重減少効果が不十分であれば、運動量を増す必要があるが、疲労を翌朝に持ち越さない範囲で、無理なく継続するようにすすめられている。「アルコール中毒患者に禁酒させるのではなく、毎日3回適度に飲酒するように指導しているようなもの」と肥満治療法の困難性が表現されているが、健康長寿を願う以上、努力し続けたいものである。

(保健診療所 小川隆三)

### アメリカンフットボール部

#### 甲子園ボウルで優勝

さる12月11日(日)、甲子園球場で行われた昭和58年度甲子園ボウル(東西大学王座決定戦)で、本学アメリカンフットボール部は、日本大学を破り大学の王座を獲得した。さらに、本年1月3日(火)、東京国立競技場で行われたライスボウル(第1回全日本選手権大会)で、実業団1位のレナウンを破って優勝し、日本一に

輝いた。

なお、甲子園ボウルでは、年間最優秀選手に贈られるミルズ杯に大社 充(農)が選ばれ、また、ライスボウルでは、最優秀選手に梅津泰久(工)が選ばれた。

(学 生 部)

#### 日 誌

(1983年12月1日～12月31日)

12月1日 ポルトガル共和国 Lisboa 工科大学 E. R. de Arantes e Oliveira 学長来学、総長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学  
2日 環境保全委員会  
6日 評議会  
7日 外国人留学生懇親会

9日 総長、職員組合との交渉に出席  
14日 国際交流委員会  
19日 放射性同位元素等管理委員会  
〃 外国人教員等との懇親会  
22日 創立七十周年記念後援会助成金選考委員会



